

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/08/1 ～2018/08/31)

1. 勉学の状況

これといって書くこともないので、今月はお休み。

2. 生活の状況

【地元民もあまり行かない？ライン川になぜかあるビーチに行ってみた】

ドイツも7月に入ると、流石に長袖で過ごすのはシビアになってくる。この国では冷房設備がまだまだ普及していないので、室内では汗をかきながら、団扇を扇いで暑さを凌ぐしかない。こうも暑いと、どこか海にでも行って泳ぎたくなるのだが、海に面している北部のハンブルクまで行って泳ぐのは面倒なので、(これは今度の旅行の時まで我慢だなあ…)なんて思っていた。そんなある日、ドイツ語クラスのクラスメイトが、「今度友達と遊びに行くんだけど、クラスの皆も一緒に来ない？」と誘ってくれた。もちろん快諾はするのだが、当日になるまで何をして遊ぶのかは全くわからないのが恐ろしい…。

そして当日、クラスメイト達と Hbf で集合して、今日の予定を立てているクラスメイトの友人に引き連れられ、我々はライン川の方向へ歩いていった。ラインタワーを通り過ぎ、橋を渡ったりして歩くこと 20 分、そこには小さいながらも砂浜が広がっていた。湖になら私の故郷でも見たことがあるが、まさか川にもビーチがあるとは。そうまでして砂浜で遊びたいのだろうか。あちこちで遊んできたドイツ人の友達に、よくこのビーチで遊んだりするのか聞いたところ、彼も人生で初めてきたらしいので、多分地元民でもあまり行かないのだろう。利用客は、川で水を掛けあったり、ビーチで身体を焼いたりボールで犬と遊んでいたりと、思い思いに過ごしていた。筆者達もそれに倣って、川に足だけ入れて涼んだり、サッカーボール版蹴鞠をしたりして、暑さを忘れるくらいに夏の1日を満喫することが出来た。近年、地球温暖化の影響でドイツでも猛暑日になることがあるので、暑さに耐えきれなくなったら迷わず友達とビーチに行行って、楽しく暑気払いするのがおすすめである。

【東南欧26泊28日の旅：ウィーン編～甘美な味わい、気品と伝統の裏に～】

3月17日夕方、ハンガリー国鉄所有のボロボロの客車、二等コンパートメントで揺られる中、ヨーロッパでは珍しく、警察による国境越えのパスポートコントロールがあった。別に犯罪者ではないのですする必要は全く無いのだが、スイスばかりを警戒していた(理由は2月分報告書を参照)ので、緩そうなイメージ(失礼)のオーストリアでまさか調べられるとは想定しておらず、取り出すのに時間がかかってしまった。チェックを終えて扉が閉められると、今度は反対側から警官が来て、「こんにちは～。パスポート見せてくださ～い。」なんて言ってきたので、コンパートメントにいる全員で「もうやったっちゅうねん。」と英語とドイツ語で一斉にツッコんだのが妙に記憶に残っている。

そんなこともありつつ、筆者たちはウィーンHbfに到着。友人が妙に嬉しそうな顔をしているので、なんでそうなのか聞いてみると、「だってドイツ語通じるんだよ！」といい笑顔で答えてくれた。(コイツ、イタリアで妙に硬いカオしてんなって思ってたけど、そうゆうことか。俺の心配は何やったんや…)などと思ったが、ここはドイツ語にそこまで馴染んでいる友人に素直に関心しておくことにした。駅裏のトラム乗り場に行こうとHbfを出ると、路面にはうっすら雪が積もっていて、耳を千切りにされてるんじゃないかっていうくらい空気が冷たかった。重いスーツケースを引きずりながら夜の坂道を登って行くのがメチャクチャ辛かったのは今でも覚えている。どこぞの機関の「世界住みやすい都市ランキング」でウィーンは今年1位になったそうだが、あの冬の寒さを調査員が知ったら、再評価間違いなしだと私は思う。

突然ではあるが、皆さんはウィーンに対してどんなイメージを持っているだろうか。芸術の都？それとも絢爛豪華な宮殿だろうか？私は世界一スイーツが美味しいのはウィーン、というイメージを昔から持っていた。特にザッハトルテは世界的に有名なケーキであるが、その由来はウィーンにあるホテルザッハーが考案したケーキだと言われている。今や、ウィーンの街中にある大概のカフェにザッハトルテは置いてあるが、どうせ来たのならオリジナルを食べてみよう、ということで私と友人はオペラ座すぐ近くのホテルザッハーへ行くとこにした。陽が十分に登ってから街に出てみると、白馬の馬車が平然と車道を闊歩しているではないか。(これがウィーン、格が違えなあ…)と思ったものだ。ホテルの地階にカフェが設置されていて、入ってみると少しくすんだベルベットの絨毯が目立つ、なんとも重厚感のある品格の内装だった。お昼ご飯時に行ったおかげか、程よく満席程度だったのでそんなに待つこともなく席へと案内してくれた。私は

ザッハトルテと、これまたウィーン名物というメランジュという飲み物を注文した。そしていよいよケーキがサーブされる。(ほお、これはなかなか…)が初見の印象。言ってしまうえば、表面にチョコがコーティングされたケーキなのだが、そのチョコが絶妙な艶を持っていて、シンプルながらこれまで積み重ねた歴史に裏打ちされた誇りを感じられる。食べてみてもまた然り。自分には少し甘すぎる感があったが、決して否定されるような味ではなく、これまで多くの人に愛されてきたことがわかる、まさに戴冠されしケーキといえよう。この王者たるザッハトルテ、ウィーンに来たらどうして食べずにいられようか。

余談ではあるが、別のカフェに行ったときに(これもまた人気店である)、店員から「カードであまり払って欲しくない」という話を聞いた。その店員さんだけかもしれないし、自分の拙いドイツ語で聞いた話なので定かではないが、コーヒー1杯でカード払いを望んでくるアメリカ人が多らしく、いちいち機械を操作するのが面倒だと愚痴を言っていたので、ウィーンでカフェに行く際は、お札1枚・小銭少々をポケットに忍ばせて、スマートにお会計するのがベストだろう。

【東南欧26泊28日の旅:ウィーン編~VIP達も泊まるホテルでルームサービス頼んで見た~】

世界一優雅なときが流れる街・ウィーン。普段はさもしい生活だけど、折角そんな街に滞在するんだから、一泊くらいまともなホテルで非日常の優雅さを味わおうではないか、というプランが筆者と友人との間で立ち上がった。(どれ、ここはひとつ、友人のセンスを試してみよう)というウルトラ上から目線な理由でホテルの手配を丸投げしたところ、自分の予想をすっ飛ばして”Hilton Hotel”を予約するというハイセンスぶりを見せてきた。Hiltonといえば、各国の要人や首相も滞在する優良ホテル。宿泊費もバカにならないのではないか(この感覚は皆さんと同じなのだろうか。)と思っていたのだが、冬のオフシーズンのおかげもあったのか、思いの外安かったという印象である。冬のヨーロッパ旅行では、一流ホテルも案外狙い目かもしれない。そんなわけで一晩だけの煌めく夢、開演である。

エントランスから”場違い”を感じながらチェックインをして、ルームキーを貰った。今回用意されたのは2階の角部屋。わざわざ角部屋を指定したというのだから、友人もなかなかこだわっているようだ。部屋からは表通りと公園、そしてよくわからないが雰囲気のある教会が見えるという眺望の良さ。普段泊まってるホテルとは明らかに違うまともな室内設備もあってか、かなり感動したのを覚えている。そして夜になるとよくわから

ない教会がライトアップされて、綺麗な夜景を眺めることが出来た。正直そこいらの観光名所より記憶に残っている。「こんな夜に外を出歩いて、寒い中レストラン探すのダルくない？」という意見が出てくるのは、もはや必然といえよう。(初めてのルームサービスを、まさかウィーンで受けることになるとは…)、ウィーン・ヒルトン・ルームサービス、この3つの単語が並ぶとロマンを感じてドキドキしているあたり、私もまだまだ下流であることがわかる。

友人はヴィーナーシュニッツェル、私はラゲーソースのパスタとサラダを選び、(どんな風に運ばれてくんのかな?)なんて考えながら待つこと10分、コンコンコンとドアが3回ノックされる。ドアを開けると、頼んだ料理が白いテーブルクロスをかけられた大きな台車に運ばれてやってきた。(それどうやって持ってきてん!?)なんて思いながら、台車を部屋に運ぶ。台車は運搬用ではなく、そのままテーブルとして使うらしい。「食べ終わったら廊下にテーブル出しといてください。」とあって、特にチップを貰おうという姿勢も見せず、スタッフはスタスタと帰っていった。こっちはこっちで、いそいそと飲み物と椅子を用意していただくことに。食べてみると、普段の食事にはない、明らかに何かに気を遣っている感じの味がした。要は「美味しい」、それだけである。それに想像よりはるかにボリュームもある。「綺麗な夜景を眺めながら、美味しい食事を食べてる俺ら、生意気だよね～」なんて言いながら、我々なりの優雅なひと時を堪能した。ちなみに、3品頼んで50ユーロだったので、そこらのレストランと対して変わらない価格だと思う。なんだか日本だとひどく高いイメージをルームサービスに持っていたので、こういう経験をするなら、少なくともウィーンでは値打ちものだと思う。

【東南欧26泊28日の旅：プラハ前編～神秘の探求・秘されし調査～】

3月21日、なまじウィーンの良さを知ってしまったがゆえに、後ろ髪引かれる思いでプラハ行きの列車に乗り込む筆者。車窓をボーっと眺めてても平坦な野原が流れてゆくだけで暇なので、月間報告書を書いて暇を潰したりして4時間、列車はプラハ・ナドゥラツィ駅に到着した(正直、読み方が合っているかは不明である)。昨晚のHilton Hotelとは打って変わってボロい安ホテルに着いた筆者は、(まあ、自分の身の丈にはこれが合ってるのだろう)なんて悲しい諦めをつけて、少しカビ臭いベットに横たわるのだった。

翌日、生憎の曇り空の中、とりあえず観光名所らしいプラハ城とカレル

橋に行ってみただけだが、どんよりとした天気が素朴な外観により寒々しさを与え、その上、昔使われていた処刑道具・拷問器具なんて見せられてはたまったものではない。その日の晩ご飯は、いささか味気なさを憶える有様であった。

プラハで2回目の朝を迎え、のんびり屋の私は珍しく焦っていた。このままではプラハがつまらない都市、というイメージで終わってしまう。そんなはずはない、なにか面白い場所は無いのか、とGoogle先生に教えを請うたところ、ある、あるじゃないか！プラハには他の都市には無い、一風変わった博物館が沢山あるのだ。木製のツェッペリンを展示する現代美術館から、現在の日本では間違いなく検閲されるような博物館まで色々あるのだが、今回最も興味を引いたのは“錬金術博物館”である。子供の頃よく読んだ本に登場した錬金術、てっきり架空のものだとばかり思っていたが、まさか実在するとは。現実ではどんな研究をしていたのか気になったので、早速行ってみた。

ドアをくぐると、形から大きさ・中身の色までそれぞれ異なる謎のポーションが、両側の壁に陳列されていた。RPGゲームをやったことのある人なら知っているかもしれないが、それはエリクサーという、錬金術師たちが編み出したレシピによって調合された特別な薬で、それを飲むことで頭が良くなったり、異性を惚れさせたりと、通常では得られない効能を得られるという代物。(ホンマに効果あるのかな?)なんて思いながら繁々と眺めていると、受付のお姉さんから「見学する？」と聞かれたので、「したいです。」と答えると、「うちはガイドツアー形式だから、時間が来るまで待ってて」と言われた。普段、美術館などは1人で勝手に見学するので、たまには案内してもらおうのも一興だな、なんて思いながら首を縦に振った。

この日の天気は雨だったのに、待っているうちに結構な人数が集まってきた。時も人も満ちたところで、ミステリアスなツアーが始まった。薄暗い通路を通りぬけると、壁の四隅に錬金術で使われる四元素のモチーフとラテン語での名前が書かれていたり、古めかしい本や薬が置かれた戸棚があったりと、“いかにも”な感じの部屋があった。ここではヨーロッパでの錬金術の歴史や、時の権勢との関係性についての話がされた。

「ところで、錬金術師達はどこでエリクサーとかを作ってたと思う？」とガイドさんが質問してきた。我々が首を捻っていると、「実はこんなところでやってたんだ。」とあって、戸棚にあった金の置物を右に傾けると、戸棚がスライドして地下への入り口が現れた！人間、隠されたものがあるとわかると興味を持つのは普遍のようで、皆んなして「おお〜」なんて声を出していた。地下空間はかなり広く、薬草を干す場所や調合の為に使う

火をおこす場所があった。

ひとしきりツアーが終わり、最後の質問タイムがあったので、「現代社会にもまだ、錬金術はあるんですか？」と聞いたところ、なんとまだ存在するらしい。いつの日か、賢者の石が完成する日が本当に来るのかもしれない。完成したから自分がどうにかなる、というわけではないけれども、なんとなく完成してほしいので、細やかなお布施として小さいエリクサーを買って美術館を後にする筆者であった。

【次話予告】…長きに渡る旅路もついにフィナーレへ。ドイツへ再び入国した筆者たち。最初の街ドレスデンで、まさかあの街の真の凄さに気づかされるとは…。そして、ついにデュッセルドルフへ帰宅する日。最速最上の列車での家路の中で、筆者は何に想いを馳せるのか。Nächste Mal、【東南欧 26 泊 28 日の旅：最終話～ただいま、って呼べるかな～】

今回は【東南欧 26 泊 28 日の旅：プラハ後編～プラハに来たらこれを食べ！市内に唯一あるあのお店をご紹介～】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：ドレスデン編～他国の素晴らしさも紹介するツヴィンガー宮殿～】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：最終話～ただいま、って呼べるかな～】について書いていこうかと思えます。来月は勉学の状況で書くことがあまり無いと思われるので、生活の状況のテーマ数を増やします。